

十五章 現在

乳がんを切って15年が過ぎた。

この手記はもっと早く世に出したかったのだが、一度「あなたの書いたものを本にしませんか？」という新聞広告を見て原稿を送ったら、150万円出せと言われた。そのころは4人の子の教育費に金がかかる盛りで、わたしもまだ翻訳屋を開業しておらず、金が惜しかったから諦めた。昔アメリカで「創作」の講義をとった際、「最後に言うておくけど、あなたたち作品を活字にしたいって思うでしょ？でもね、出版と印刷は違うわよ。あなたがお金をもらうのが出版、あなたが金を払うなら、それは単なる印刷」という講師のことばが頭に残っていたせいもある。

で、それきりになったのだが、最近になって、「いや、あれからどれだけ時間がたっているにしろ、このままでは気がすまない。ではインターネットで発表するか」と思い立った。が、わたしの世代でネットの世界はハードルが高い。ちょうど編集を仕事にしている同級生がいたので相談したところ、思いっきり背中を押された。

「小林麻央さん（海老蔵さんの奥さん）が乳がんを公表してメッセージを届け続けたように、まどかも乳がんサバイバー（経験者）としての生きざまを世に問うべきやわ」と。

これで決心がついた。

わたしの右腕からわき腹にかけてのむくみはずっと続いているものの、歳をとるとあちこち醜くなるのにまぎれて、しょうがないわねえと諦（あきら）めがつく程度だ。もっと気になるのは、痩せたあとで左のお乳が垂（た）れてきたことだった。シリコンで全部再建した右のお乳はまったく垂れていない。イタリアの医者が「シリコンを入れた乳は垂れない」と言ったから左側にも90グラム入れたのにも、限界があったわけだ。

白髪は相変わらず少ない。それはいいが、髪のパリュームがとんでもなく減ってしまったのが情けない。全体がペシャンコで貧相に見え、とくに後ろ頭の一番上のあたりの髪が少ない。よく男性がハゲ始めるあたりで、こうなると、誰も好きでハゲルわけではないことが実感され、ひとのハゲをバカにはできなくなった。もちろん歳をとると、たいていの女性の髪は細くなってパリュームもなくなるのだが、わたしの場合はあきらかに化学療法を境に変化した。一種の後遺症というべきか。しかし単に美容上の問題だから、まあ騒ぐほどのことではなからう。

ついでの話だが、欧米では日本ほどハゲを気にしない。ひとつには白人に若ハゲが多いからだろう。イギリスのウィリアム王子なんて 30 代であの見事なハゲっぷりである。トルストイの『アンナ・カレーニナ』でも、恋人のウロンスキーが後ろ頭が薄くなってきたと友人にからかわれる場面があって、日本では主人公の恋人が若ハゲという設定はありえない、と絶句した覚えがある。もうひとつの理由は、金髪は地肌と色が似ているから、黒髪ほどハゲが目立たない、ということだと思う。髪が薄くなってきたら、彼らは潔く坊主に近いほど短髪にして、おしゃれしている。日本人の若ハゲも、かつらや増毛をせずに短髪でもいいのにな。

幸いなことにがんは再発していない。

10 年再発なしとわかったとき、夫はスーパーで買った可愛らしい花束をわたしにくれ、わたしも夫につきあって赤ワインを 1 グラス飲み、ふたりで静かな祝杯をあげた。

これで「完治」である。

イタリアから帰国するときに「マドカの人生のイタリアの章」が終わるのねと言われたのに習えば、わたしの人生の「がんの章」が終わったわけだ。いや、今からも再発する可能性がないわけではないが。

ひとまず終わってみれば、がんは人生の一部でしかない。

闘病中は人生のすべてに思えたのに！

今のわたしは茨城を離れて山口県の夫の実家に住み、技術翻訳を続けている。最近やっと英訳が上達してきて、たまにクライアントからご指名で（といっても「前の訳者と同じひとで」という程度だが）仕事ができることがあるのがとても嬉しい。母が生きていたらさぞや喜んでくれただろう。

父を一昨年見送った。

それまでは自宅に戻った父のもとへと、毎週泊りがけで2年半通っていた。そうして、ああ人間とはこういうふうに弱り、少しずつできないことが増えて、そして最期を迎えるのか、と時おり重い気分を抱えながらわたしは父を見ていた。

ひとは誰も一度は死ぬ。わたしはどんなふうに老いて死を迎えるのだろうか？ 延命治療はイヤだ。高齢になってからの抗がん剤治療も、副作用を考えるとゴメンだ。これだけ好きなことをやってきたのだから、悔いはない。若いときからあった死へのあこがれのようなものも、ひそかにずっと続いている。

しかし、告知直後に死ぬのはいやだと泣きわめいたことを思い出すと、苦笑いが出る。たぶん、わたしはいくらエラソーなことを言っても「悟りをひらいた」わけではない。

ま、人間、そんなものさ。

一方、明るくさっぱりしていた義母は、義父が事故で急死したあとでひとり暮らしの不便と不安にさいなまれ、ひどく怒りっぽくなってしまった。認知症も進み、わたしの父が山口に帰ったあとで茨城の家に同居に来た。

その最初の1年でわたしは8キロ痩せた。それくらい大変だったわけだが、それまで十数年、何をがんばっても痩せられなかったことを思えば、認知症の姑（しゅうとめ）との同居は最強のダイエットだった。そう、どんな最悪と思える事態でも、探せば何かステキなことが必ずひとつはある！

義母は今では、わたしが乳がんになったことを覚えていない。過去の悪い思い出も忘れられるのだから、認知症にもいいところがあるじゃないか、とは夫の弁である。夫が早期退職して介護の主戦力となった2年後、義母は施設に入

所し、わたしたちの人生の「介護の章」は一段落ついた。

わたしの現在の一番の楽しみは庭木の刈り込みと草取りである。とくに太い枝を鋸（のこぎり）で切って落とすのが快感。人間に元から備わっているという破壊衝動が有益な形で発揮されている感じがして、最高のストレス発散になる。今年は草刈り機デビューもした。緑の中での作業はこれ以上ない精神的癒しになるばかりでなく、からだを使い、汗をかくから肉体的健康にもいい。裏の崖を含めて農家の敷地は広く、翻訳の合間の手入れでは、なかなかいきとどかないのが悩みの種ではあるが。

居住している築90年の古民家は内部が暗く、寒い。内部のリフォームはするつもりだが、白壁と板、瓦の外観を変えるつもりはない。イタリアにいるとき、イタリアにあるものと同じくらい美しい伝統建築が今の日本にもあるのか？という疑問があったのが、山口のこの家を見たとき氷解したからである。

これだ！ この古民家は美しい！ これは守らなければいけない！

もちろん、単なる古い農家に過ぎず、一般的に見てとりたててすばらしいというものではない。しかし、わたしにとっては日本特有の美しさのひとつである。

お囃子は細々ながら続けている。山口から茨城に毎夏行って、祭で大・中・小2つの4種類の太鼓を叩きながら歩くのだ。あんなすばらしいものをやめる気にはなれない。

そのうち、子どものころ弾いていた古いピアノを今の家に移して修理し、バッハのインベンションをまた弾きたいと願っている。日本の民間伝統芸能であるお囃子と、西洋のクラシックであるバッハの音楽とは、どちらも伝統的な音楽、ということを除けばなんの共通点もない。が、ともにわたしの心を深く魅了し、満ち足りた気分にしてくれる。

ここまで読んでくださったあなたは、ひょっとしてがんの闘病中だろうか。それとも単にミラノ暮らしに興味を持たれたただけだろうか。どうであれ、わた

しがあなたに望むことはただひとつ。

あなたにも、あなたの人生をできるだけ楽しんでほしい。

人生は一度きりだから。

そして…

ここに書いたことはすべて事実ですが、あくまで個人の、それも 2002 年前後の、主にイタリアでの経験です。がん治療の最新情報については専門家にお尋ねくださいね。